


 書評

高橋哲郎 著

精神分析的精神療法セミナー

発見・検討・洞察の徹底演習〔技法編〕

土居健郎

この本は長年メニンガ・クリニックで診療に従事した著者が 1996 年日本に帰国した後、大阪を中心に開始した日曜セミナーの記録を集大成し編集したものである。全体は 15 章に分かれ、それぞれ症例報告とスーパービジョンの要点、次いでそれと関連する精神分析的基本概念の考察と問題提起ならびに参考文献、最後に参加者チームとの対話でしめくくられている。参考までに各章の題目を列挙すると次のごとくである。「セラピーにおける規則性と自発性」「バウンダリ(境界)の臨床的問題」「チーム治療におけるセラピストの主体性」「カウチ使用の精神療法」「解離と分裂と抑圧についての探索と支持の意味」「思春期の危機と家族の力動」「抵抗とは何か」「外傷・空想・妄想と症状」「転移性倒錯」「恋愛転移か自己愛転移か」「分裂部分対象関係」「対象喪失と喪・抑うつ症のワークスルー」「転移性恋愛への抵抗」「解釈の種類と特に蘇生解釈について」「自我の葛藤か欠損か」、以上である。ところで以上の題目を読んだだけでそこに書かれている内容を想像できる読者は皆無ではなかろうか。この点本書はこれまで精神分析的精神療法について書かれたいづれの書物とも異なっている。外国人著者による著述の翻訳であろうと日本人著者による著述であろうとその点区別はない。それくらい本書は創意工夫に富んでいる。これは長年米国に滞在してそこで訓練を受けたばかりか、さらにその地で一精神分析的精神科医として実践を続けた著者にして初めてできた偉業であるといって過言ではないであろう。

このようなわけで本書は簡単に読み通すわけにはいくまい。最初から順繰りに 1 ページずつ読んでは考え、考えては読むより他に著者の意図を汲む方法はないであろう。しかしもしそれができるならば、恐らく著者の演習に実際に参加した者と同じく

らい多くの益を受けるに違いないと私は信ずる。実際本書にはそのように熟読玩味する価値がある。本誌の読者の中にはこの本の書名を見ただけで、ああこれは精神分析の本だ、自分には関係がない、と初めから敬遠する向きが少なくないかもしれない。確かにこの本には現代精神医療の主役を占める向精神薬の話は出てこない。しかしよく考えてほしい。向精神薬で異常な精神状態を変化させ、その結果として自然治療が招来されるということはあってよからう。しかし非常に多くの場合、もし状態が好転しても、長期にわたり投薬を継続することがむしろ通例ではなかろうか。むしろ精神分析的精神療法の場合にこそそこで起きる精神状態の変化の意味を共感をもって理解できるのではなかろうか。であるから、精神分析的精神療法を何か物好きな精神科医だけが試してみる特殊な療法であると考えるのは間違っている。これはむしろ本来はすべての精神科医が心得るべき精神医療の本道を指向していると私は考えているのである。

ちなみに私は本書の著者とは旧知の間柄なので著者がどんなに苦勞して学問の道を切り開いてきたかいささか知るところがある。著者もまた私のことを熟知しており、それで本書の中でも私の説が 2 度も引用されたのであろう。それを言うのはただそれが私にとって名誉であるからだけではなく、そうすることで多少とも本書を一般読者になじみ深いものとするのができればと願うために他ならないのである。

(聖路加国際病院顧問)

●A5 250 頁 2007 定価 3,780 円(本体 3,600 円+税) 金剛出版